

## 脱「少女文化」化する「占い・おまじない」

——雑誌『マイバースデイ』の事例から——

立教大学 橋迫瑞穂

### 1 目的

この報告の目的は、80年代の「呪術＝宗教的大衆文化」、特に少女を中心に広まった「占い・おまじない」文化が、90年代においてどのように少女文化から撤退していったのかについて検討することにある。80年代の少女文化と「占い・おまじない」の接点は、これまでさまざまな視点から検討されてきた。一方、2000年代の「スピリチュアル・ブーム」においても、「占い・おまじない」文化が大人の女性を中心に受容されているという動向が見られる。90年代以降の「占い・おまじない」文化の動向、特に少女文化からの撤退を検証することで、その後の「占い・おまじない」文化との連続性と断絶を明らかにする手がかりとしたい。

### 2 方法

そこでデータとして、少女向けの占い雑誌『マイバースデイ』を取り上げる。『マイバースデイ』とは1979年に少女向けの占い雑誌として実業之日本社より創刊されたものであり、全盛期には女子中高生を中心に約40万人の読者がいたとされている。そのため、「呪術＝宗教的大衆文化」を代表する雑誌として、これまで宗教社会学、宗教学の観点から若者文化論までさまざまに言及されてきた。本発表では国会図書館分館、国際子ども図書館に所蔵されている1979年創刊号から休刊する2006年12月号のなかでも、90年代以降に発刊されたものを中心に取り上げる。

### 3 結果

80年代の『マイバースデイ』について調査、検討をおこなった結果、いわば教祖的な位置にある占い師を中心に、「占い・おまじない」に基づく世界観を共有する読者同士の緩い連帯が存在していたことが判明した。そのなかで「占い・おまじない」は少女文化を基礎とするライフスタイルの記事と結びつくことで少女たちの日常に浸透した。そして、学校生活のなかで周囲の人びとを幸せにすることが重要だとする価値観を強化し、そのことに向けた精神的な訓練や成長を目的とするものとして設定されていた。それに対し、90年代に入ってからライフスタイルの記事そのものに比重が置かれ、「占い・おまじない」はそれに準ずるものとして設定される。そのなかで、「占い・おまじない」は教室のなかで自分の居場所を正確に把握し、そのことで先生、友人や恋人との関係を円滑に進めるために参照する道具として位置づけられるようになる。また「少女らしさ」は彼女たちの内面を強化するものではなく、コミュニケーションを円滑に進めるための推進力として設定されるようになったのである。

### 4 結論

以上から、『マイバースデイ』の「占い・おまじない」は90年代において、少女の内面に深くコミットメントする世界観を提供するものから、コミュニケーションを円滑に進めるための、いわばモニターとしての役割に変化していたことが伺われる。その結果、少女文化としての「占い・おまじない」は一定の魅力を保ち続けることができなくなったのではないだろうか。特に、90年代後半から急速に普及していったケータイはこのモニターに取って替わるもの機能を持つモノであり、それがさらなる少女文化からの「占い・おまじない」の撤退を促進するものであったことが推測される。

参考文献 芳賀学・弓山達也 1993『祈る ふれあう 感じる——自分探しのオデッセー』IPC.